

# 仲間に入ってゆけない者をどう指導するか

## — 集団指導の中での個人指導 —

### 指 導 部

#### 1. 集団の中での個人指導

イ、「個人指導のみ」の限界

われわれの学校では、ここ数年来、問題児の早期発見(その為の組織とテスト)、問題児の生活指導(ケース・スタディ)、問題児の生活指導のための体制—カウンセリング(相談室)と、テストの系列化と、個人指導を中心とした研究と実践をすすめてきた。

しかし、昨年の研究でも課題としてのべたように、個人指導だけでは、個人の指導も不十分である、ということを感じさせられてきた。非行児にしても、非社会的な「悩めるもの」にしても、集団の中でうまく適応しえないところから問題が発生しているのである。両者の指導の仕方は異っても、やはり終局においては、「集団の中で、個人指導をも通して、集団の中にまで」という指導が必要なのではなからうか、という反省がなされた。

ロ、集団の規律化と積極的活動

一方、全体的な生徒の集団指導の面においても、別稿で生徒部からのべられたような反省がなされ、その面からも、集団指導を強化してゆくことに全力を集中することとなった。これは又、高校における道徳教育としてのホームルーム活動、社会倫理の実践の試みとも結びつきながら、現在まで進められてきたわけである。

ハ、その中での個人配慮の必要

しかしながら、集団指導は、ともすれば量的に処理してしまう危険性をはらんでいる。集団のめざす方向に同調せず、反抗し或いは取り残されてゆくものもできてくる。はみだし、或いは孤立しているものに、ただおしついたり、叱ったりするだけでは、彼らを動かしてゆくことはできない。反抗し、孤独を好むという現象は、a、青年期の正常な心理としての現われである場合もあり、b、何らかの個人的歪みとして、病的な徴候である場合もある。aの場合は、集団的に処理してゆくことは可能であっても、bの場合は、その原因をたしかめ、対症療法的な取扱いが必要となってくる。そうでないと、かえって彼らは歪められてゆくか、

そうでなくても、せっかくのよびかけも彼らの頭上を通りすぎてゆくだけになってしまうであろう。

#### 2. あるホーム・ルームの場合

そこで、われわれは、ケース・スタディとして、高校のある組をとりあげて、集団の中での個人の動きを分析し、そこから問題の具体的なあらわれと、その指導の仕方を考えてみようとした。

何故このホームルームをとりあげたか というと、ソシオメトリック・テストの結果、この組には、他の組に比して孤立児が非常に多い(11名)ことを発見したからである。そして日常の観察でも、クラスの雰囲気がもり上らず、まとまりがない、そのことと何か関係があるのではないか、と思ったからである。

イ、孤立児、不適応児とその原因の分析

ソシオマトリックスの中で孤立児と、異常に好悪の激しいもの、或いは排斥されているものをえらんで、その原因をたしかめてみた。

(図表=折りこみを参照)

高校時代の成績、中学時代の成績、知能、性格(中学時代指導要録、I・C・Gテスト、Y・Gテスト、SCTテスト、MPC Lテスト、INVテスト、クレベリン・テストなど使用)家族関係、などを分析した結果、ほぼその原因と推定されるものとして、次のようなことを見出した。

a、孤立児、不適応児には、ひとり子(クラスに5人のうち4人)末っ子(14人のうち5人)、長男(とくに姉妹の中での)が目立って多い。彼らには、大別して2つのタイプがみられる。その1つのタイプは甘やかされたことが基盤になって、その上にその後の学検での集団生活、学業成績での不適応、とくに後者に由来する家族の態度、および自分自身の劣等感から、情緒的不安定、社会的未成熟、神経質のため集団の中にうまく入ってゆけない。

もうひとつのタイプとして、親がきびしすぎるか、冷たく、或いは兄弟の中での地位や親との関係から、強迫的不安にかれ、まじめでおとなしく、又努力もするが、かえってうまくゆかず、或いは強情、反



抗的になっているものがある。

両者とも、抵抗力、自己統制力、持続力を欠いている。

- b, このクラスのグループ・ダイナミックスは、他のクラスにくらべると、男子においては成績の上位グループと、下位グループが分かれて対立しあい、中間の成績のものにこの孤立児が多い。

又、女子においては2人ずつだけの封鎖的グループが多くみうけられ、成績下位の男子グループと同調する傾向があった。

そして、ひとりっ子、末っ子はその大部分を占めている。

他のクラスは比較的大きくまとまり、成績の区別があまりなく入り乱れているし、クラスの活動も活潑である。

その原因のひとつとして推定されることは、同学年の他クラスでは、ひとり子、末っ子はいるが、男子のそれが少ないこと(12; 4)。女子はかえって多い(4; 9)が、女子のひとり子、末っ子が同じような者だけでひとつのグループをつかって、更に大きなグループの中に包含されていること。これらの原因がある程度他のクラスの雰囲気を活潑にしているのではなからうか。

- c, ケースとしてえらばれたこのクラスにおいて、もうひとつ大事なことは、このクラスでのリーダーの問題である。このクラスでリーダーとなっているものは、おとなしい性格のものと、積極的ではあるが好き嫌いのげいしいもので、そのため、クラスをうまくまとめ、リードしてゆくことに困難があるようである。

#### ロ、グループ・ダイナミックスの問題

以上分析したように、このクラスで孤立児が多いということは、相当孤立児自身のパースナリティによるところが多いということは認めなければならない。これは、クラス編成の問題からも考えなければならないだろう。(とくに最近、都市中産階級を中心として、子供の数を制限してゆく傾向がある現状からして、これは見のがすことはできない)

しかし、とにかく他のクラスにおいても、ひとり子、末っ子はいるわけだし、問題徴候をもっている生徒もいる。にもかかわらず、とにかく一応まとまりをみせて活潑に動いているということは、更に何か別の要因が働いていると考えねばならない。恐らくそれは、他の組の場合、リーダーに円満で明るい性格の者になっているということもひとつの原因であろう。しかし、もうひとつ教育的―すなわち指導―ホーム・ルーム担

任の経営指導の方針のちがいは見のがすことはできない。

それは、他のクラスにおいては、ある程度教師が指導的な手を加えてきたこと、このケースのクラスでは、担任教師の方針として、できるだけ生徒の自主性にまかせて、その動くままにしてきた、ということである。例えば、夏休みの林間学校や遠足の時などのグループの編成を、対象のクラスでは好きな者同志の組合せを、他のクラスでは機械的に名簿の順でやったという。本校のように1学年2学級で、しかも附属中学から多数入学するという状況では、たえず既成のグループをこわし、グループを固定せず、いろいろな仕事の場面で、多面的な接触の機会を作りだしてゆくことは必要なことではないだろうか。

### 3. どのように指導してきたか

以上分析してきたような問題をふまえて、このような場合、どのように指導していったらよいのであろうか。

その指導の方向としてわれわれは次のように考えた。

#### イ、ホーム・ルームの指導

とにかく、個人の内部にも問題があることは事実としても、それは、全体的な集団の雰囲気―集団のグループ、ダイナミックスの如何によって、相当、その表われ方、個人内部の悩み方もちがってゆくと考えられる。

その後、教師は、従来の自由―あるいみでは放任―の態度を改めて、集団のつくりかえ―仲間つくり―に着手した。まづ、積極的にリーダーを養成していくこと。消極的な性格の子でも、教師がバックアップし、支えてやることによって、クラスの中心核として成長してゆけるであろう。それから、いろいろな行事(文化祭・遠足など)においてできるだけ、孤立児たちをみんなの中にひき入れ、何かの役割をもたせ、集団活動に参加させた。それから、更にホーム・ルームの話し合いの時、思い切って色んなことを吐き出させ、対立を表面化させることを通してひとつのカタルシスを行ない、それをむしろ転回点として、クラス全体の雰囲気を変えようところみた。

#### ロ、クラブ・サークルへの参加

いろんな形で集団に参加させることを通して社会生活の訓練をつんでゆくこと。そのため運動クラブ、文化クラブの全員参加を学校全体として考慮し、今学期になって生徒議会で検討中である。

## 仲間に入ってゆけない者をどう指導するか

### ハ、個人指導

先にのべたように、仲間に入ってゆけない者は、何らかの形で内部に問題をはらんでいる。それが本人の意志によっておきたのではなく、主としてむしろ親の側に——いや、生れた順位や数に、といてしまうと、運命論的すぎるけれども——しかし、ともかく、現在、彼らがその為、困難に直面していることは事実である。

#### a、学習上の困難の除去

彼らがかもっとも困っていることは、彼らの意識に上っているものとしては、まづ学習上の問題である。勉強ができないことが、知能よりもむしろ、その性格的な、例えばがんばりのなさ、気の弱さ、に原因するとしても、現在、高等学校までの十数年のハンデイキャップはやはり痛切な事実である。そして、学業上の劣等感が彼らの孤立をますます強め、逃避的にさせ、不安におとし入れ、あるいは強迫的努力にかりたてているわけである。この面での助力こそ、もっとも緊急で、かつ効果的なものではないか、と思われる。

#### b、人間的成熟へ——自己中心性の脱却——

彼らが孤立しているのは、結局は、幼児の甘やかされすぎか、不安強迫か、によってその後の成長が阻害され、依然として自己中心的な幼児的性格を脱却できないことにある。しかも、一部の者はそれに気づいて努力してもうまくゆかないし、大部分のものは、ただ逃れようとしているか、反撥（合理化）しているだけで、自分たちが何故、友人を得られないのか、自分で苦しまねばならないか、よく分っていない場合が多い。一方ではそれに気づかせ、一方では耐性——自己統制力を訓練してゆく必要があ

る。そのためには、できるだけ、家庭と連絡し、その原因となった親子関係を親にも理解してもらうようにすると同時に、本人にはカウンセリングや読書指導を通して自己自身の変革が必要なことを洞察させてゆくと共に、一方では、きびしい規律を要求してゆくことが必要である。彼らの多くは、依然として、わがままで、だらしないものが多い。

しかし、やはり、究極的には、彼らを温かく理解し、彼らが、何でも話せる、彼らを包みこんでゆく——そのようなグループ・ダイナミクスがホーム・ルームの中にめばえてゆくこと、それがもっとも大事なことではないかと思われる。

## 4. 結 び

以上、ひとつのホーム・ルームを中心に考察をしてきたが、これまでにのべてきた問題は、多かれ少なかれ、どのホーム・ルームにも存在していることであるし、又、それぞれその指導に努力している。

結局、問題をもった生徒が、彼自身の内部的な歪みを克服して、新しいパースナリティ構造をもった時、彼は集団の中にスムーズに参加していけるようになる。それがカウンセリングを主とする個人指導の目的でもある。そこに到る道程として、カウンセリングなどの個人指導だけでなく、集団の場において、それが行なわれていくこと、むしろ、カウンセリングもそうした集団的な場の中で正當に位置づけられてゆかねばならないということ、それを痛切に感じさせられている。

今後、更に実践を重ね、よりよい指導の方法をさぐってゆきたいと思っている。